

(逋信省認可)

(明治廿六年三月六日)

義方文藝誌

第
五
號



音樂雜誌

一冊金六錢半年分郵稅共にて
金三十五錢郵券代用一割増

本誌は歐洲樂、雅樂、能樂、明清樂、俗樂舞踊、音謠、等新古を問はず樂譜を添へ解釋を附したる者なれば初學者にも能く獨習し得るの便ある音樂の好侶たり

發行所

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

音樂雜誌社

東洋文學

一部五錢 郵稅五厘 每月一回發行

誌中。論文。理文。美文。雜錄。雜纂。等ありて皆是今代の名文東洋文學に恥ざるもの文學者は必ず一本書讀すべきの良誌なり

發行所

千葉縣安房郡北條町北條千七百十九番地

智發堂

社 注 意

!!! 社 告

本誌の前身相切れ候時は發送の節帶封に朱書致候間御覽の上は速に御拂込被下度候尙御沙汰なき時は發送の義見合申候此段前以て申上置候也

本誌は凡て前金に候へは御注文のみにては發送不仕候也

五月三十日

義太夫雜誌社會計係

内務省許可 (明治二十六年一月廿六日)

◎投書規則

投書は凡て到着の順序を以て掲載するも未完稿は之を採らず○批評等にして類似のものある時其優れたる者を掲載す○次號に譲し投書にして其事柄の既に陳腐と認むる時の之を省く○誌上の匿名なるも投書に住所姓名なき者は掲載せず○投書は眞書にて廿四字詰とし判明に認め義太夫雜誌社編輯局宛にて送るべし○投書の返却せず○問合せは往復はがきか又ハ郵券封入の事

社 告

本誌定價 一部三錢五厘 前金の分は本社へ

地方は一部に付郵送費五厘申受く

廣告料 一行廿四字詰四錢十行以上一割引

但義太夫謠曲に關する者に限り三割引とす

代金爲替半圓以下は郵便切手にて宜敷以上は

神田郵便電信支局振込受取人岡田廉二宛の事

發行所

東京市神田紺屋町四十四番地

義太夫雜誌社

明治二十六年五月二十九日印刷同三十日出版

發行兼編輯人

東京市神田區紺屋町四十四番地

岡田 廉 二

印刷者

全市下谷區御徒町三丁目百一番地

奥山 東 太 郎

印刷所

全市淺草區黑船町廿八番地

東京並木活版所

◎社告◎次号には女義太夫の番附を添申(但し公評にて定むる者なれば投書すべし)

義太夫雜誌第五號目次

謾言	天狗の事	翼々居士	一頁
寄書	與女義太夫書	蟻々子	三頁
傳記	耳塵集抄書	櫛の屋色人	四頁
古文	院本の話	桃の屋鶴彦	四頁
曲園	西澤一風小傳	峯の家霞	五頁
批評	竹本小土佐小傳	七文字屋微笑	五頁
雜錄	上るり十二段(承前)	小野通作	六頁
雜報	源藏の徳利	蜀山人	八頁
餘興	祝歌一首(小説)	木村武之祐	九頁
附錄	はり扇(小説)	七文字屋微笑	十頁
廣告	饒舌(竹本小清、豊竹素行)	一口評	十頁
廣告	豊竹一二三	柳と駒辰	女義太夫見物記
	團平師の教訓	竹本品太夫	十三頁
	東西々々の事	花の家鈕月	十四頁
	厭ふべき理由	个坡情仙	十五頁
	天河屋儀兵衛の事	樂壽亭主人	十五頁
	浄瑠璃古今の序	朱鞭子	十五頁
	門左衛門に就て	服霞峰	十七頁
	有髮無髮の事	釣深亭主人	十七頁
	近松翁の追悼會	月次會	大字五行
	床本の豫約	小土佐嬢	よりの來狀
	諸新聞にて本誌の評判		
	情哥	一口嘯	粹多樂史
	太平記忠臣講釋	近松半二	一頁
	相摸入道千疋犬	近松門左衛門	五頁
	數件		

本誌より最も編輯に注意を加へ且つ少しく改良の上毎號古人の傑作を附録とし掲載す

◎義太夫練磨會廣告

本會ハ明治廿五年の九月創立せしものにして會員既に三百有餘名の多きに至れり本會の要旨ハ探長補短を本とし切瑳琢磨の効により義太夫謠曲の進歩を計り俚俗の快樂をして優逸ならしむるにあり左れば人會を望まざる、諸君は藝人と否とを論せず黨派を問はず老幼男女に關せず廣く之に應ずるものなり規則書を要せば郵券二錢封入本社内左の者宛にて御申込次第進呈すべし

廿六年三月

幹事 樂壽亭 壽樂 七文字屋微笑

花の雫

一本誌は四方雅伯粹士の名吟玉句を集め有名なる宗匠大人に撰評を乞ひ其最高妙なる者而巳を掲載する者にして恐らくは風雅雜誌中右に出るものなからん

漫筆 金花齋翁假名垣魯文
 小發 松林伯圓先生演 其他艶文戯文古事雜錄
 情 定撰 夜雪庵金羅 不白軒梅年 其角堂機
 歌 定撰 夜鶴庵覺齋 暉素庵桂香の各宗匠
 狂句 會田皆眞大人 狂歌 秋琴亭緒依大人
 冠句 櫛の屋色人先生
 林鴻堂万年 壽量坊四山の各宗匠

花の雫發行所

芳文堂

東京市京橋區銀座二丁目十三番地

義太夫雜誌

第五號

明治廿六年
五月三十日

發兌

謾言

天狗之事

翼々居士

佛の伽藍などには天人の像の彫刻あり多くは樂を奏するの体にして女性の如く柔和なるを示す。天主教の畫にアンゼル又チエリピンとて之と同じ様の者あり何れも手の背に羽翼あり。我國の天狗は羽翼のある所は之等に似たれども其趣甚だ異なり。眉濃く眼大に鼻あくまで隆く髻長し。其行裝に至ては頭は修験者の如く衣類は格別異なるとなきも腰より下部は大横縮の染分其上足に草鞋を穿ち手に羽扇を携て片時も之を放さず。或人之を評して曰く。天狗は慢心増長の圖なり。第一頭の常人にあらず修験者に擬たるは如何なる奇異の術を行ふやも知れずと云ふ虚勢を示す。第二鼻の隆きは博識賢明誰か我右に出つる者なし學ばんと欲せば慎で誨を受くべしと假に尊嚴の威を示す。第三に大なる羽翼を持たるは一瞬の間にもよく遠國に飛ひ行きて不思議の事を行ふべしとの虚勢を張る(羽翼は鳥類の手なり手あるもの羽翼を持の理なしされは借物たる間を要せず)第四に羽扇を持たるは人の裁決し能はざる事を以て判斷すべく又風を起さんと欲せば之を搖せば軟風

暴風思ふがまゝに臻るなど、わられもなき僞勢を張るものなり。第五たちつけ草鞋の行装。若これ迄吐し大言虚誕露るの難に遭は、速に逃げ出さむとの用意なり彼の背に附したる羽翼の如きは元より借物なれば何の用をもあさず。故に草鞋の必要あり。天狗の慢心に富みて逃足に注意つくせるよと斯の如し」とは誠に當然の評なり。然らば今の世間幾万の天狗あるやしかし之は經世の天狗なるべし。其他に一種専門の小天狗あり其類多しと雖も普通稱せらるる者を擧れば

- 圍碁 將碁 釣 二輪車 小説家 鶯 菊作り 哲學者 銃獵 俳句 水泳 端艇 料理人 手術師
- 演舌家 大弓 茶の湯 乗馬 かるた 手踊

等あれども就中天狗連と云へば直に了解し得べきものは我等の社會義太夫なり。是全く此社會の天狗は何れよりも數多くして實際天狗も多ければなり。故に我輩は最初より天狗にあらざるの辯解を試みるなく寧ろ自ら天狗なりとなげ出したるや去可成最下等の者にやあらむと表紙には羽扇にあつて八ツ手の葉を画がさしは是ぞ木の葉の小天狗なりと云ふ證據なり而して此小天狗將來如何なる事をか吐露するそは本誌を續々見て知り賜ふべし」

(前號の論說中邦權とあるは封建の誤にて他に意味ある譯にてはなく爰に之を謝す)

淨瑠璃は害悪の隱蔽美德の光澤を發見する眼鏡なり

ケンブル

與女義太夫書

蟬々子

みなく様ますく御きげんよく御精勤にて御せん盛のだんかずく目出度どんじりり扱どや三四年ほど前までは左程いやしくしき噂も無之ぶとに其當時品川風の都ちう吹あふし候ため皆様も御油断なく常にねん身を謹み遊ばされ候へしにや醜聲どもちうはらど耳にする位それも多きは下等かん札の連中のみにて候へしかは是でこそ義太夫かたりの本分わが國の優藝を任せ申候もはづかしかぬ事と實は蔭ながらよろまび居候とある此頃に相成候て如何のわけがうにや好ましからぬ風聞の毎日、新聞上に見ぬことなく或る新聞などにては女義太夫の文字におおくと傍訓仕候様に相成まふとにく嘆かはしきことにせんじりりかく申と新聞屋などは有ること無い事をかきたてる故一々誠と思ふには及ばぬと被仰候人も有之候へども俚諺にも『形なきに影はさぬ』とやら如何に筆まめの記者とて無暗にはかぬものかと被存候さなくとも他の藝人衆とは違ひ日々の勤めの高尙なるものに候へは少しは御注意あるべきに只々客の眼を引く様と鬚の如きも稚子。若衆。立兵庫。切下。達摩がへし。ね初形。など、あつれもなき結び様樂屋には客のさ々めく聲も聞へる状態なれば新聞屋のさとき耳に入るは無理には御座なく候斯様にては高位高官の人にて万一聽聞の思召あるも見合さるゝ次第になりて自ら地位を低ふし竟には見返るものもなく道徳世界の外に追出さるゝ様に相成候左様に候へばみなく様其身分をかへりみて今少しく意づけいやらしき噂のたゝぬ様なされたくねんじ上りりこは皆々様の爲ばかりにてはなく義太夫其ものゝ爲に御座候なり右ぞんじより候まゝ一筆まめ申上まへらせ候めでたく』

寄書

耳塵集拔書

櫛の屋色人

元祿年中げんろくねんちゆうの俳優やくしやにて道外形だうけいの名人めいじん（正保年中立役とな
る）金子吉左衛門かねこきちざゑもん（法名。必能院敬信）か故人こじんの説せつを聞
く毎まゐに悉ことごとくく書附置かきつけおきたるもの七部しちぶあり其中そのうちの一部いぶを耳塵
集しゆうと名づけな（一名役者藝品定秘抄）故人こじんの逸話いつわ四十六件
を載のせ其中そのうち淨瑠璃太夫じやうるりたふ宇治加賀椽うちかがのえんが門弟もんていの問とひに答こたへた
る逸話いつわあり輒近ちかみぢう淨瑠璃義太夫じやうるりぎたふの行おこなはるゝ世よの中なかに取と
ていと面白おもしろき話はなしなれば拔書ぬきがきして茲こゝに載のす。

○宇治加賀椽の事并に弟子問答

淨瑠璃太夫じやうるりたふ加賀椽かがのえん弟子でし共寄合どもよりあふて曰いはく師匠ししやうの淨瑠璃
は節局ふしごころになれば極めて見物けんぶつ賞あはめる我々われらは何程なにほどか語かたつても
賞あはめる事ことなし然さればとて我々われらが附つけたる節譜ふしにもあふず
師匠ししやうの曲譜まがつけを能よく習せらひて語かたれども賞あはめめざることは不
測しきなりと云いへば加賀椽打笑うちわらひ爾さにてはあふず吾われは何なに

どなく淨瑠璃じやうるりを素朴すなはに語かたり節局ふしごころにて節ふしをかたる阿主おとし
等は淨瑠璃じやうるりを語かたり出だすと否いなや賞あはめられんと思おもひ初手しよて
から終おはりまで面白おもしろくかたる故節局ゆゑふしごころになりて最早もはや面白
ふ語かたる節ふしなきゆる賞あはめる處ところなし第一だいいち賞あはめられんと思おもふ
て語かたるはわるしとなり』

櫛みぢの屋色人やかきといはくく、適切てきせう與と下演劇げんげき於金閣寺きんかくじ塙松まつ永大膳ながだいぜん與二
木下藤吉きのしたとうきち一圍かこむさむ棋藤吉きとうきち曰いはく欲ほつせばかたんとむらうさざるをまがのこ
比喩ひゆ一對警語敬服』

院本の話（承前）

桃の屋鶴彦

高師かうのし直な太たい平へい記き忠ちゆう臣しん講かう釋しやく
塩谷判官しんやはんくわん

明和三年丙戌十月十六日

近松半二

竹本三郎兵衛 作

三好松洛

されは便べんなふんと思おもへり此等これら恐おそらくは古ふるき原本げんほんにはの

第八ツ目大屋由良の介が山科の住居へ足輕寺坂吉右衛門の葛間宅兵衛と名乗り師直の上使と偽り入來りさま〜の筋ありて後一味連判の中に加り彌よ鎌倉へ旅立せんとする條下に

由良の介心ははげみの聲高く。コレ〜見られよかた〜。たいはくせいしんせんに現はれしうせいの光りを奪ふ時は味方に利ありとそんおが詞。今の天さい其氣にあたるは時の吉相さい先よし云々

これもまた世に知られたる名高き文句なり其文意を熟讀するに太白星を師直に比し衆星を義士に比したるものならんには太白星のために光りを奪はるれば義士其人達の大不利にして吉相にはわらず仍て古版の本を調べ其他間合などせしかども皆前文に異ならず余が考案には衆星の下の字を省きしならば太白星が光りを奪るる事に聞て趣意も貫き又語るにも多數の文字を改め

されは便なふんと思へり此等恐らくは古き原本にはの字なきを早くより誤て主旨の反對になれるにも拘らす汎く傳授せしものとは知られたり俳優も太夫も今日猶前文の通り云ひて怪まざるは笑止の事といふべし』

傳記

西澤一風小傳

峰の家 霞

西澤一風正本屋丸右衛門と云ひ大坂の書肆にして戯曲書數種を著せり而して享保十一年北條時頼記を著し最好評を得豊竹座に於て興行二年間打續しと云ふ享保十六年五月廿四日歿す年六十七墓は大坂下寺町大蓮寺に在り法号を常譽真寂禪定門と云ふ辞世の句にちりゆくや風に常盤の木の葉雨

竹本小土佐小傳

七文字屋 微笑

小土佐姓は本多名はつと明治六年四月愛知縣名古屋に

生うの初はじめ湊みなと太夫たふにつきき義ぎ太夫たふを稽古けいこせしが程ほどなく死し去きよ
 に逢あひ後照吉のちのあきちに學まなぶ十歳じゅうさいの時妻吉つまきちと稱なづふ照吉あきちの一座いざと
 名古屋なふるや富本亭とみほんていにて興行きやうぎやうせしが偶た士佐しざ太夫たふ妻吉つまきちの『谷三』
 を聽きき音調おんてうの巧たくみなるに感かんし遂ついに請かふて我子わがこの如ごとくし
 稽古けいこに怠おこらざりしが果はたして其甲斐そのあひわりしかは是こゝより小
 土佐こぢと名乗なをらせ柳枝りゅうし京富きやうとみ小柳文綱こりゅうぶんつなの連中れんちゆうに加くはり地方ちほうに
 出いで至いたる處評判ちよへいはんよく就中しゆうちゆう岐阜きふにて興行きやうぎやうの時ときは跡あとの見臺けんたい
 に隠かくれて見みへざるより聽衆けんしゆうの中ちゆうより取去とれと屢しばしば々と聲こゑの
 かゝりしかは遂ついに無見臺けんたいなしにて語かたりしと土佐太夫とじだふは毎いっも
 此座このざの眞打まじりなりしが京都きやうとにて興行きやうぎやうの際とき士佐太夫しざたふの順でに
 なれば聽衆けんしゆう歸かへるもの多おほき爲なり席主せきぬしの依賴たのみにて小土佐追こぢおひ
 出いしを語かたり毎まい晩ばん二段にだんつゝ勤とめたりし十四歳じゅうしよさい初はじめて土佐
 太夫たふ東太夫あづまたふ土喜太夫とぎたふ等らと上京じやうきやうし自みづかり眞打まじりとなり興行きやうぎやうせ
 しに大おほに人歳にんさいを得え後のち分わかれて女によの一座いざとなりしが翌年あつねん病やま
 氣きの爲ため歸國きこくし暫しばしばく休業きぎやうせしが或人あるひとの勸すすめにて又地方またちほう
 に出いで昨廿六年きのうにじふにねん八月はつがつ再び上京またじやうきやうするに至いたる嘗かつて大坂おほさかの大

君より申てまゐれどの御てうとどてかさくちなれども

あそとようしわか君にかくれなしうし若君と申はそも

番附ばんづけに記名きなせられし事ことあり女子にょしにして此この榮えいある實じつに例れい
 外ぐわいなり今回こんど又投票とうひょうの五名家ごめいけに加くははり愛嬌家あいきやうかの位置いちを占し
 めしは其その當否たうひは兎うに角人かくにん氣きの一斑いっぱんを知るしに足たりる小崎知こさきち
 事じ嘗かつて小土佐こぢの先代せんだい萩はぎを聞き左ひだりの一句いっくちを贈たぐられしと因ちな
 に記しす』
 五月ごご雨あめや萩はぎの若葉わかばにぬるゝ袖そで〇

古 曲

上るり十二段(承前) 小野通 女
 うちのくわんけん 七だんめ

さるほどに上るり御せんは此よしを聞召きこしめしさればあそと
 よよし有人あるひとにてそむふそや一いっくさかけてまいれよか
 し十五夜ごじふごいふにと仰おほける十五夜ごじふご此よしうけたまはりう
 すきぬとつてかみにかかけ重おもてもんほかへたち出見いでみれば
 此君このきみいまたたゝせたまひてれわしますいかにや申さん
 たびのどのにもやみつかふか申にてはさむらはすわか

君より申てまゐれどの御てうとてかさくちなれども
ちらぬはなど申されければ御をうしは聞召くふまをた
ちのこかくしやうにてましませは一しほれるかのゐら
はこそとりすまして申させたまふけに誠ちはやふる
かみも櫻をおしむにはどつかせたまひてよきついでに
玉つさひとつかくらんとてゆんでのわきよりしたんの
やたてとり出しすみすりなかし筆をそめやまとおとは
を引おめておまゝとあそばし引むすびはするかのふ
しのねのつの國のなには入江にあふねどもあしのねと
じかさど、め十五夜御せんにわたさせ賜へは十五夜此
文うけ取ていそさやかたへかへりいかに申さんわか君
様た、今のたひのどの、申させ賜ふはちはやふる神も
さくらをれしむにはのさくらなれどちらぬはなかなど
申させ給へて候そやとてかの玉つさを奉り上るり御せ
んはかの玉つさをすこしひいて見たまへは筆のため
とのけたかさよもじのならひのぢんぢやしよははれは

あそとようしわか君にかくれなしうし若君と申はそも
三國一さんごくのふへの上手と承此君うけなはるのふへにくわんけんして
おまうこしやうのおほへにせんとて一度のつかいに玉
ものまへ二度のつかひにあこやのまへ三度のつかいに
れほろけどの四度のつかいにかるかやどの五度のつか
いに十五夜この六度のつかいにたかくどの七度のつ
かひのまゐるうへ二度をゆるさぬものならばみやあの
くわじやかゆづまのみへかくわけんにれくしたりと思
ふへしさりなかつ此程のけわけのほこりにて色かくろ
みてはづかしう候へ共かゝるついでによしある人のす
みかをも見はやなども思召七度のつかいのきゝやうの
つほねはなのたもとをひかへつゝ上るり御せんのやか
たをさしてそうつゝれける十五夜此よし見るよりもに
もへりのたゝみをひろえんになけ出しこれへとせ
うし給へは御をうしは御らんして是やあのあつまの女
人かくわけんにふひたるにむねんなるにましてひろゑ

んにてふかんことおもひもよらぬとなりと百しきのは
 なを御らんしておれなるはなのつほみてさきてとてさ
 らぬていにておわしますすみたわう此よしみまゐらせけ
 によまこと此どのはさしきをゑふませ給ふとみへて候
 ひとまへたてゝかさふんとたゝみに取てはどれゝそ
 うんけんへりにかうゝひへりむらさきへりのたゝみを
 三でうかさねてしかせつゝてんでうにはからにしきを
 ばりにしきのまくをうたせつゝ玉のそだれをかけさせ
 て是へゝとせうし申せば御をうしやがてきしよく
 を引かへひろゑんにてすな打はらひさしきにわからせ
 賜ひつゝさしきのちやうしをうかゝひてすあしねとり
 をあそはしける十二人の女ぼうたちのやくゝをそろ
 へててうしのほどもまたれける中に上るり御せんは七
 へのみすの内うちにこのやくとどぞ聞へける十二人の女ほ
 うだち此君のふへにくわんけんすることねもしろけれ
 ど申されける御そうしは聞し召うしわかみやあにあり

義太夫雑志を祝して

木村武之祐

君かまた立聞したナと云はれて這入る京地矢太郎きやまちやたらう聞きい

し時一でうどのにてはなみくわけん二でうどのにて月
 見のくわけんとてくわけんもあまたきゝしかどかほと
 のつまたといまたなしかゝるあつまのはてゝにもや
 さしき女人のましますかや一めみたしとねほしめす上
 るり御せんもうしわか君と申はそも三國一のせう人と
 承うけたまはる一めみたしと思召すいづれも神のけしんと人た
 ちにて有ければ折たりふしつちかせとつとふき七へのみす
 を一とにさつとふきわけそれより一め見たまひてほと
 なく戀こひのたねとなり御をうしは十五夜御せんをふかく
 たのませ賜ひて吉次きちじがやどへそ歸かへられける』

文 園

赤垣源藏あかぎげんざうの所持しよとせし徳利どくりの箱はこに

蜀 山 人

徳利どくりの口くちよりものは言いはねども

むかしれもへは涙なみだこぼるゝ。

と申されける御そうしは聞し召うしわかみやおにあり

むかしれもへは浪こぼるゝ。

義太夫雑誌を祝して 木村武之祐

善悪の文に糸竹交へたる

淨瑠璃雑誌よめよ諸人。

はり扇(一) かすみ

天下を轟かす智恵も一握の脳味噌が本城なれば。五尺の軀軀を藏ひるに四疊半は過た器物と。下宿屋の二階に晝も寐轉び居る義田祐介。活版摺の義太夫本に自分勝手の調節。『また初まつた』と隣室での迷惑も無頓着。洞魔聲でうなる毎も三勝のサワリ。用心と棚に在る洋燈を下す人のあるもれかし。お園なほ郷關の慈親は。今頃何處にどふしてと只ならぬ心配の上。早く歸國を樂に送る月々の學資。若し此状態を問はれたら祐介どの。其時に何と答ふる。

『イヨ日本一と障子の外かゝ聲かけられて。』誰だ京地

君かまた立聞したナと云はれて這入る京地矢太郎。『聞たども。聞いて居るさの障子越しと云ふ譯サ。イヤなかなかの上達。』毛百年も辛防したら夫こそ大隅も既足ダ。れうふ山吹『實がないと云ふ洒落か。餘り難有ない。夫はそうと君『義太夫雑誌』を見たか』見たどもく。此義太夫の通様に問ふだけ野暮ダ『へい』『僕は彼の五名家の投票には大不服サ。第一清玉を美貌家なんぞに。女ひでりの國ではあるまいしネ君』さうどもく彼に就ては何か曰があるらしい。微笑とやら彼必ず袖の下を『シイ聲が高いぞ。アハ、アそおで君は帶の下?』僕ならば鐘升さなくは愛之助。オット忘れた瑠璃之助と云ふ艶的も『其もが氣に障るネ』お尤千万。併しネ君美貌家に撰ばれしとて賞すべき譯ではないサ。もどく義太夫を語るのが本分なれば『實に左様ダ。けれども此頃の状態を見たまひ。巧藝と美貌と孰れか人氣あるを。いくも藝か上手と來ても。痘痕盲目

では賣口の悪き十九世紀。人氣を見て評判する今日には。愛嬌も美貌も必要ナ「ア、世は濁れり」「君ひとり醒たりカ。冷水ハ如何でおざいアハ、ハ、ア」「アハ、ハアと笑ふ折下女が障子を開けて立ちながら。「瑠璃之助さんが「左様か通しナ。オイまだ要があるワ甘錢銀で鶏肉を。左様して酒も五合斗り取てくんナ」「大層奢るネ。色男にも大低ではなれない」「偶にや君」「イヨ御馳走さま入り來る瑠璃之助はにこくしなから」「今日ハ……昨晩はどうも」「サ此處へ」「瑠璃之助とやう近ふく」「は、」「どんだ四段目ダ。アハ、ハ、ア」

批

五十一

饒

舌(三)

七文字屋 微笑

竹本小清

現今の女義太夫社會にて東玉を除かは先づ搦指を此嬢に屈せん体度と云ひ調節と云ひ特に音聲の一点は嬢の

特有義太夫其物には實に悦ぶべき賜ものにて彼の俗耳を引く新内の比にあつざるなり就中「太十」「引窓」を聴くに至つては只感服々々然るに餘り人氣のなきは所謂新内のにあらざる故か然れども嬢よ爲夫に意を狂ぐ勿れ聴て好まざるものは好まざる者が耳なきなり社會は公平此儘に見捨て置さ見よ其第一着として五名家の一人併も斯道にては最も誇るべき巧藝家として其高点を占めしにあらずや」

豊竹素行

義太夫社會改良家の一人なりとは世間の評判なり其志や勇ありと云ふべし而して何れに於て改良せんと欲するや場合に於ては余輩力を添ゆるを辞せざるなり兎に角嬢は旅行癖と見へ長く府下に足を止めざるは不可思議なり伎能一方の領袖たる價値は十分或人嬢の「柳」を聴さ比なさものと生でに評せり然れども惜い哉微笑未だ耳にせざれば其當否を判断する能はず」

「居せん休度と云ひ調節と云ひ特に音聲の一点は嬢の

だ耳にせざれば其當否を判断する能はず」

竹本越子

青山 堅胃堂 優男

現今げんこん女義にょぎ太夫中ちゆう特とくに優すぐれし者ものは越こ子こなり實じつに鷄けい群ぐんの孤こ鶴かくとは之これを云いふか見みよ此この社せ會かいの通つう患わんとも云いつべき輕けい薄はくなどは絶たて見みざる處ところ且かつ技ぎ藝ぎも越こ路ろ丈ぢやうの丹たん精せい空くうしからず語こと呂りょ節せつ廻まわなどは微び妙めう愛あいをよく義ぎ太た夫ふ通つうの定てい評ひやうある處ところなり然しかるに咄はな々はな怪あや事こと近ちか頃ころ心こころ得え難がたき事ことの多おほかりける其そが當あたり敵かたきは貴き社しゃの七しち文ぶん字じ屋や先せん生せいなり先せん生せい前ぜん號ごうに於おて饒ねう舌せつしくけく越こ子こ令れい嬢ぢやうはオオチチヤヤッッビビーーなりと』 (未完)

微笑曰 好敵手を得たり此欄是より賑はし。

一句の評判

名古屋 花の家 鉦月

鶯うぐいすの聲こゑうう々々かな旭ひでの出でかな 小 土 佐
鶯うぐいすのおゑに田いな舎なかはななかりけり 仲 路
香かもつやも無なきもの乍なら竹ちく歸ふ人じん 柳 枝
ままけた人ひと笑わらふておおけつ雪ゆきの道みち 榮 枝
手てにととるな只ただ見みて居ゐよはな蒔あざみ 小 柳

竹本越子岡目評

本郷 梅 痴 生

流なが石いしは師し匠しやう越こ路ろ太た夫ふの仕し込こ書しよ生せい連れんに喝かつ采さいをとるは水みづの出で花はなの若わ手て故かなるべし語かたり前まへは活くわつ潑せつを以もつて稱しやうせらるゝ程ほどにて男おとこ太た夫ふの如ごとく大おほに妙めうなり發はつ音おん節せつ回まはし扇せん子すの遣つかひ方かたなどは師し匠しやう丸まる出だし何なに分ぶん体たい格かくが体たい格かくだけ音おん聲せいのまゝ不ふ十じゆ分ぶんの處ところあるも亦また感かんずるところなきに非あらず嬢ぢやうよ只ただ望のぞむ艷えん聞ぶんの可なる成べ立たたさる様やう心こころがけ藝げい道だうに熱ねつ注ちゆうせふれんまとを』

小土佐一口評

淺草 履 掛 生

三さん味み線せんと云いひ節せつ回まはしと云いひ達たつ者しやななの聲こゑも善たしと云いふにはああふふねねど悪わるくもなし併しかし左さの三さん癖くせあり湯ゆを飲のみ熱あつい風かぜをとること 湯ゆを飲のみ熱あつい風かぜをとること 左ひだりの膝ひざを語かたり乍ならドどシしノのととるまと

高座へ上つて場内をにらみ回すこと

第三のくせなどは所によりて書生連を惱殺するには好
き策ならむ乎』

柳と駒辰

牛込 末廣家 要人

五月十六日の夜より牛込わら店亭へ掛りし大阪登り花
澤柳枝改柳及び駒辰の兩人は初ばんより仲々の好評に
て要人も二日目聴聞せしが當夜の語り物は駒辰が一日
吉丸三）柳が（赤垣出立）なりしが駒辰の音聲は一寸小
土佐と云ふ風あるも角兵衛獅子にならぬは感心柳の赤
垣は例の生酔言葉も軽く佐平太と永らくの應答も客に
あきの來なかりしはれてから（音羽屋と聲の掛りしは
妙）併し此語り物は兩人共大坂では十八番のものなり
との觸れ書きなりしが其割りに聴客に感動を興ふると
の薄すかりしは未だ耳なれぬかくなるべし』

女義太夫見物記

湯島 人まねや小僧

綾之助 仲々面白し鬚の両眼鏡に似たるは御上品の積
りか一寸御面相の美ので大人氣とはれた任合の事

小土佐 随分ねおそかななり髪の様近頃一定せり片鬘
が皆様の御氣に入たどの事

住之助 仲々甘味あり赤いおべは處女のあどけない
様で可愛らしいどの事

越子 右肩を下げるは如何なる譯か口を曲けるが恐
ろしく笑ふ處は何とも云へぬどの事

小清 穩かな所欠呻が二三ツンとすました所愛嬌が
足らぬどの事

清玉 賑にして眠氣醒大妙藥見臺があわれはせぬか
と氣を揉む人もあるどの事

微笑曰 小清嬢の演技を聴き欠伸を催すとは失禮
ながら義太夫に耳が無いと申すの外なし田印なら

ながら義太夫に耳が無いと申すの外なし田印なら

兎も角江戶ッ子で此語を吐くとソレ大事の固券が

下り升ぞ』

豊竹一二三 下谷 名 輪 岩 治

大阪登りにて餘り人氣もないが藝はなかく達者なもののなり先頃何かの事に付中間と争ひがありしとかなれど堪忍が第一ゆくは天晴の書生殺になるべし』

八重子の評 飯台 龜 甲 生

庭前の清泉迂餘曲折千紫萬紅の間を廻り流れ或い落ちて瀧をなし或は堰かれて淵をなし嫋々たる春風新柳の髪を櫛るの下小波靜に青苔の鬚を洗ひ無心の錦鱗を弄るが如きものは此嬢即ち八重子あり』

雜 録

團平帥の教訓 門人 竹本品 太夫

拜呈貴社益々御盛大奉賀候借貴誌第四號餘興中御記し有之候「長い物は象の鼻と春子太夫の節」と有之候事に就き師匠の御教諭有之甚だ心得の爲にもなる事と存候故記して貴社に投す

師曰すべて節の長きと云ふは譬へは「何とやうして何とやら」と云ふを皆かたるによりて聽者に長くきあゆるなり之を前半分を捨て後半分を語るべしさすれば三味線にてテン(音)と受けたる時大間に語り出しても聽者に短く聞ゆ譬へは竹に雀の場

早くはしる
せつき立られこれかまあ

までは捨て
「ユックリ念を入れて語るべし

すべて右の心得あれは聽者に長きと云はれず又ふしに飽もあらず三味線にても又同じ例令は「何とやらして」すぐテンとうけるは凡て間がせまき故かたりにくし

(所)によつては此限にはあらざれども)もつどころは持て走る所ははげしく弾けば聴者に飽の來るおとなし能能心得れなくべし』

因云 藝道の事に就ては何人を論せず快よく需に應せらるればね尋ねあるべし予も好みて紹介可仕候也

東西の事 名古屋 花の家 鈕月

鶴林玉露に世に仙道を云ふものを蓬萊と云ひ佛をいふものを天竺と云ふ其蓬萊は東なり天竺は西なり抱朴子に齋州より日出る處に至て號して太平地と云ふ佛經に西方を云ふて極樂世界とす太平極樂ひとり東西を稱す古より戰爭只南北にありて東西を云ふ事まれなり或人羅氏が意を述て云ふ俗に相撲物見場の騒動を下知して東西と云ひ南北を云はず戰爭の方を避くるなりと一理ありと云ふべし』

厭ふべき理由 忍岡 个 坡 情 仙

一日人あり談偶々女義太夫に及び評し來りて遂に左の厭ふべき理由を見出しぬ逐一當るや否や証し難きも試に記して世の同好に訴ふ

- 彼は定めて 多情なるべし
- 彼は定めて 口説上手なるべし
- 彼は定めて 情夫あるべし
- 彼は定めて 美味を食ふべし
- 彼は定めて 美衣を好むべし
- 彼は定めて 生意氣なるべし
- 彼は定めて 世事に鈍かるべし
- 彼は定めて 經濟を知らざるべし
- 彼は定めて 芝居好きなるべし
- 彼は定めて 朝寐なるべし
- 彼は定めて 酒好きなるべし
- 彼は定めて 人魚喰なるべし
- 彼は定めて 悋氣深かるべし

天河屋儀兵衛の事

樂壽亭主人

忠臣藏より後に増補狂言の内天河屋入牢の仕組種々あり此實説は「赤穂精義内傳所」(寫本四十卷物)にも有りて大坂三郷總年寄天河屋利兵衛とて町人ながら古き家柄なり然るに大石に頼まれ彼夜討の道具を調へ江戸表へ出しけれども其鎗梯子職人に事かき内本町上之丁加賀守藤原の神力丸市左衛門と云ふ者へ藏屋敷よりの頼まれものどて繪圖を渡して誂へしを鍛冶市左衛門より町奉行太田和泉守殿へ届けしゆる利兵衛に不審かゝり細工は暫く延引及ふべしとて先つ利兵衛を召され御尋ねありしに天河屋いかにも答ふることあたはず只家内の用心にもと我工夫にて誂へ候なりと陳じけるゆゑ爾々疑加はり遂に元禄十五年二月初頭入牢となり家内残らず御預となりしうへ種々の拷問にかゝりし事は義臣傳に委し元大坂三郷總年寄の身分なれば諸所

の屋敷へ出入り用違もする家柄ゆゑ是程の道具を誂へしとて左まで強き御吟味もあるまじき事ながら是れより七ヶ年前表町四丁目分銅屋借家に住みし軍學兵術の師範を表とし内心には及びなき謀逆を企てし畑野藤右衛門といふ浪人鈴ヶ森にて磔となりたる者あり其徒ならんどの御疑ひより後々は妻子まで入牢し種々珍らしき責苦にかゝりければ彼夜討の沙汰大坂まで聞えし上なからでは白狀せざりしとかや實に大石の能く人を見立る事感ずべし利兵衛後ち京都に退隱して没す墓は地藏院(俗に椿寺といふ)地内にあり」

淨瑠璃古今の序

神田 朱 鞭 子

頃日竹豊故事を一讀せしに淨瑠璃古今の序の一章あり面白ければ記して投ず
 夫れ淨瑠璃は人の心を種として萬づの趣向とはなれりける世の中に在る人事業繁さものなれば心に思ふ事を

見るもの聞く物に付て作り出せる也色に愛づる世話事
 義理に清める時代事を見れば幾年生ける者何れか此道
 を好まざりける力をも入れずして人の情を感せしめ嫁
 を悪む姑にも哀と思はせ男女の中をも和らげ憎き親父
 の意をも慰むるは此道なり過し時世の竹本筑後椽なん
 淨瑠璃の聖なり又豊竹越前椽といへる人ありけり淨瑠
 璃に奇しく妙なりけり頼光山入の道行は竹本氏の一節
 に綾錦の如く語り雪の段の出語りは豊竹氏の音聲に雲
 井までもひびきなんと思はる越前は筑後の上に立たむ
 事難く又豊竹は竹本の下に立たむ事かたくなありけ
 る此人々を置きて吳竹の世々に蔓茂り多き門弟達の中
 に竹本播磨の椽なん世に知れし名人なりしかぞ惜さ
 哉不幸にして短命なりき爰に往古の事をも此道の意を
 も得たる人當時は僅に五六人なり而はあれども彼是得
 たる所なんありける

一 豊竹若太夫は歌仙第一僧正遍照の歌の意に同じ淨

瑠璃の様は得たれども其言葉花にして實少し譬へば
 圖に画ける女を見て徒に情を動かすが如し

一 豊竹筑前椽は歌仙第二在原業平の歌の意に同じ其
 情餘りに調子下し譬へば盛り過たる花の色は少しと
 雖も而も薰香あるが如し

一 竹本政太夫は歌仙第三文屋康秀の歌の意に同じ淨
 瑠璃は巧者にして其体俗に近し譬へば商人の能き衣
 着たるが如し

一 豊竹駒太夫は歌仙第四喜撰法師の歌の意に同じ詞
 幽かなる様なれども始め終り正し喩へば雲かくれせし
 秋の月の曉の風に晴るゝが如し

一 竹本大和椽は歌仙第五小野小町の歌の意に同じ古
 への竹本頼母の風なり音聲艶しくして氣力なし喩へ
 て謂はゝ能き女の惱める所あるに似たり

一 竹本綿太夫は歌仙第六大伴黒主の歌の意に同じ頗
 る逸興あり然れども野鄙なり譬へば薪を負へる山人

花の姿を木めるが如し

は眞なりと云ひ菅原某は十一月廿二日なりと云へり暫

一 豊竹若太夫は歌仙第一僧正遍照の歌の意に同じ浄

の花の蔭に休めるが如し

此外の太夫達其名聞ゆるまど野邊に生ふる葛の榮え曠
おり林に繁き木の葉の如くに多かれど未だ淨瑠璃の奥
儀には至らざるべし竹本の流れ絶えせず豊竹の節細や
かにして正木の藤永く傳はり鳥の跡久しく止まらば程
拍子をも知り事の意を得たらん語り人達は大空の月を
見るが如くに上代を仰ぎ今を希望さすめかも』

門左衛門に就て 服 霞 峰

翁の故里を「卯花園謾録」には越前とあり「羈旅漫録」に
は參河とあり半顔居士は越後と云ふ然れども長州深川
は正しきものならん

翁の幼名を藤四郎と呼び親族のうちにて世に知られし
は兄の相國寺宗長老弟の岡本一抱妹の錦紅にて翁は第
三子なりと菅原某は云へり

「聲曲類纂」には翁の命日を十一月廿一日と記し「嬉遊
笑覽」には十二月廿七日と記す木崎某は十二月廿一日

る逸興あり然れども野鄙なり譬へは薪を負へる山人

は眞なりと云ひ菅原某は十一月廿二日なりと云へり暫
らく記す』

有髮無髮の事 釣深亭主人

「一の谷嫩軍記熊谷陣屋の場」に「暇の一件かくの通り
と兜を取れば切拂ふたる有髮の想」と云ふまどあり何
の事やら譯がわからず想の字は相の誤寫とするも猶解
し難し之を假に山と見做して云ふときは伐り拂ふたる
有樹の山これにては解し難し乍去伐り拂ふたる無樹の
山と云へは誰にも事のわかるべし此文句も切拂ふたる
無髮の相とすれば解し得へきにあらずや有と無想と相
と速に文句を改めては如何しるして世の識者に質す』

雑 報

近松翁の追悼會 院本著作家泰斗近松門左衛門は人
も知る如く毛利家の臣楳杜氏に出で一世の著述之を愛
せざるものなし京都は翁が初めて机檀を開きたる地な
るに未だ一碑も存するなきを歎き其末葉なりと云ふ三

條に住む楮杜新介氏が發起となり去る廿一日を期し寺町本能寺境内に一碑を建設し大法會を執行せられたるよし。

月次會 去る十三日上野停車場前山城屋の樓上にて

義太夫練磨會の月次會を開かれたり。

大字五行床本の豫約 廣告にもある如く弊社の岡田

壽樂と賛々舎にて大字五行の床本を右版に製し大家の

調節を入れて廣く求めに應ずる由因に云ふ如何なるも

のにて床本となれば大低壹圓以上にあらずれば需む

る能はざるものと聞けば安きよと此上もなし期限の切

れざる中に注文あるべしと一寸提灯もち。

小土佐嬢よりの來狀 前號の記事に就て左の如く申

越されたり。

時節から皆々様御きげんよく居らせられめでたくぞんじまいらせ候
候扱まいお引立にあづかりまことに難おん禮申上まいらせ候
付ては此頃雜誌拜見仕候ごころ「太十」のごこに付誰かよき人に習
ふたる者なるへしご記し下されたるは御ぞんじなきゆへ御尤に
ぞんじ候私共幼少より土佐太夫の門入にて此「太十」も師匠より
覺はしものにござ候あいだの「だん一寸御禮」たりしらせま
で申上まいらせ候めでたくかしく
小 土 佐

義太夫雜誌社御中

諸新聞にて本誌の評判

徳嶋新報 「前略」苟も義太夫節の籠圈内に属するものは網羅して殘さず是れ亦一種の文學雜誌なり。
奥羽日日新聞 「前略」悉く義太夫に關するものにて

義太夫を好む者は是非見るべし面白き雜誌なり。
茨城日報 義太夫と言へば卑しき様なれど人情の極
致を描き出すもの之に増すものなし義太夫通たらんも
のは乞ふ本誌を購へ無益のあとはあるまじ。
静岡日報 「前略」斯道の古術を記し今時の批評を下
し大に義太夫社會には益する雜誌なり。
岩手公報 「前略」斯道に關する古今の材料を掲載し
たる好雜誌なり。不相替斯道の珍種多く且今回は近松翁の肖
像畫を附録とせり。

大本 石版摺
五行 床本豫約廣告

御所櫻堀川夜討 辨慶上使の段 紙數四十枚
朱點者 竹本大隅太夫丈 用紙にし

豫約期限 七月十五日延引なし。部數千部限り。
豫約正價 金五拾錢 (豫約の際半額を納め後)

製本出來 八月中にて期限外は定價八拾錢とす
十部以上豫約取纏め御周旋の君へは一部呈上
右に付問合は凡て往復はかき事

豫約申込所 岡田 廉二
横濱市港町五丁目廿七番地

同 小島 銀次郎
東京市京橋區瀧山町八番地

石版印刷所 賛々 舍

廣小路 魚夫

與羽日日新聞 「前略」悉く義太夫に關するものにて

石版印刷所 賛々々 舍

餘興 粹多樂誌

情歌 題 癩。文。浮名。

浮名立のは覺悟の前よ主と妾の中じや者 知顔太夫
主へ遣文何から書と思案つくく 筆を杖 餘志亭朝臺
彌れるのも覺悟で好へ送る迎の初會ふみ 越州樓福壽
恨みつらみを書玉章は氣斗先へどり筆 薰風居美蝶
遠さかる程病が募る癩の押手の出來ので 伏屋賤子
遂て何處へか行方知れぬ日頃起し癩の虫 ねなじひと
泥も眞水にすむ小商文の反古でまく銅貨 壽美屋豆八
本望遂たは柴部屋らしい文も拙假名手本 ふれや小雪
主の顔見りや直様癒る癩の虫まで好のか 浪廼家千鳥
ればこ心で口には云へず文に言て晴す胸 末廣家要人
漏れ浮名がツイ媒で今じや嬉しき女夫中 れなじひと
浮名立のも厭はぬけれと外の最負が氣掛 巷地嫌人
可愛此子の顔見度にむかしの浮名を思出 さわき

添て讀のもさまりが悪い主を呼出文の壳 韋川漁夫

秀逸

紅粧連

恨の數々言盡す共思の丈には足らぬふみ 伊藤常子

歸さ嗜ならない主とは知と未練が起嘘癩 越州樓君子

文は残りす紙線にひねり又も煩腦の大為 伏屋賤子

心こめたる其文でさへ添は不用と手拭紙 小松田紋太

念が届て落付癩もお前の優しいこゝろ柄 三河屋信夫

逢は恨もツイ云兼て文で後から書れる ねなじひと

口で云れぬ苦勞が胸に積で毎しか癩と成 樂壽亭主人

來なき心配來りや入つ當苦勞こうじて癩の種 稻亭寶升

會話調

御覽よ癩迄怒て居ワ御前があんまり遅柄 愛嬌戀史

感吟

ゆめでも逢たいわたしの心 小雅連

まくら紙にもぬしの文 忍月庵主人

粹多評 枕をはづさぬ様に切角の思付だから

たてたれ方へあゝろでお禮れい
日本橋 三河屋小秀

うきなで添そはれた此この二人

粹多評 相合傘あいくがさを書かいたのは店みせの小僧こそうださうで

軸ひとね 撰者 粹多樂史

癩しやくを押おさるゝ手てに又また涙なみだぬしも此頃瘡このころやせたあと。

涙なみだじやないかど心こころに苦勞くるう濕にじんで分わからぬ文ふみの文字もじ。

立たつた浮名うきなにある其義理そのぎりを棄すてて別わかるゝ身みの辛つらさ。

乱題

○玉藻たまもの前まへ三 千住 恍亭 寐男

曲まがつた事ことさへ道春館みちはるやかたあひにやまけるかかつら姫ひめ。

○字じむすび 本郷 旭家無雅句

主ぬしの來くる夜よを指折ゆひおる蛙逢かはぢあふてさせるのさうじがみ。

一口ひとくちはなし 社末 にあゝ男

義太夫雜誌ぎだいふつしの四號がうに或人あるひとの豫想よさうとかで女義太夫連おんなぎだいれんの演劇しほ役割やくわりが出て居ゐるが時平ときへいを京枝きやうしと東玉とうぎよくが一日替いちにちかりとは

不當ふたうだ僕わがなら差詰さしづめ小春こはるにはめるね『なせ〜』『デモ小

春はる時し平へいといふではないか』

オイ八公はちこう開ひらきテ夕ゆふべ義太夫ぎだいふを聞きに行いつたら中入なかいりになつ

てかゝ真打まひか俄はわかの癩しやくで休やすみテので半札はんざサ左様さようした

ら側そばに居ゐる書生しよせいが今夜こんやも阿古屋あこやだと云いつたが何なんの事ことだ

ろう『そうよ手前てまへの様ような野暮やまよや分わかるめへ『貴様きさまにわ

かるか』己たれにもわからずテ『なんだ人ひとを……………』『ダガ

真打まひは誰だれだ』小土佐こつさよ『ハ、アでは』分わかつたか』小土

佐見さみせん(琴三味線ことさまみせん)と云いうんダ』

○本誌第六回課題 一題五句吐六月二十日べ切 延着除卷三光の君へ本誌呈

冠句かんぎゆ附 題 飽にあふくささきいたいナ。(義太夫の世界)

作例 つけましたごこの寄席でも緩ゆるい助すけ あきむこね幾度いくたきいてもつば坂つばさかに

淨瑠璃 次號じがうよりは本誌ほんしに此一欄このいちらんを設たげ義太夫本中ぎだいほんちゆうの名文玉作なまふたまを摘載ていさいせんとす寄稿きこうの人は外題がいだい并ならびに作者そごうを附記ふろくし且評論しよろんを附つするもよし但し長ながきは好まざる也

義太夫雜誌の没書として聞々出宅へ御邸

劇役割が出て居たが時平を京枝と東玉が一日替りとは

廣告

新文海

第四年第三號三月廿八日發行毎月一回一部金四錢五厘無遞送料

本誌論説には對外の精神氣象等史傳には田中邦男通胤履歷○復讎傳交通門には謹答小野璋平君文藝門には詩歌文章雜纂には歌を以て巧に詩を譯す○歌を讀むは難事にあらす○故典辨疑○俗說辨妄等を記載す又毎月懸賞の文詩歌句の募集あり既に發行以來四年の星霜を踏むに至る

發行所

徽州文社

投書 批評は可成公平に願上候藝人の秘密をあばき或は人身攻撃などに涉る者は採らず又お家諸君に禮の爲本誌送呈仕候も住所不明の爲返戻の事有之候間實際の記名を乞ふ 微 笑

私事都合により左の通り改名仕候

下谷區仲徒士町十番地語龍事改め

野澤鶴助

弊舖の寫眞は可成鮮明を主とし年を経るも變色なく且可成廉價を主とし貴需に應じ約束の期限は履行可仕間何卒御來車被下度願上候

五名家の寫眞私方に在之候

上野廣小路鳥八十の隣

吉川寫眞師

拙者儀自今義太夫練磨會々員諸君に限り其面の長短を問はず一葉は無謝義にて揮毫の依頼に應ず

淺草區小嶋町五十七番地木村事

畫工 燦雲 仙史

璃

は好まざる也

義太夫雜誌の投書にして間々拙宅へ御郵送有之候人御座候もかくては遺漏の恐有之候得は必ず本社編輯局宛御發送の樣願上候也 服部 霞峰

上野停車場前山城屋旅舎

家屋潤大各室呼鈴の備あり食物は衛生を主とし夜具は清潔にして凡て旅客の用を達するは迅速丁寧萬事油斷なく勉強仕候間必ず第一泊の上御試を願ひ併く從來の御客様方にも猶一層御愛顧あらん事を祈る

僊華琴

上製壹面撥附金三圓五十錢より並製壹面撥附金二圓より二圓八十錢荷造費金三拾錢

僊華琴は形體麗雅、音質優美、音量擴大、彈法容易、攜帶便利、且一器にて和漢洋の諸曲を彈するに適切なるは大に世の賞讃を得たるを以て証すべし請ふ音樂の志士試に彈味あらん事を

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

取次所

音樂雜誌社

告 條

ちらし。口上がき。引札。廣告の案文。意匠などの。もとめに應ずるものは。義太夫雜誌社の紹介。峰の家震と申ひとなり

以上

音樂雜誌

一冊金六錢 半年分郵稅共にて
金三十五錢 郵券代用一割増

本誌は歐洲樂、雅樂、能樂、明清樂、俗樂舞踊、音謠、等新古を問はず樂譜を添へ解釋を附したる者なれば初學者にも能く獨習し得るの便ある音樂の好侶たり

東京市麹町區有樂町三丁目一番地

發行所

音樂雜誌社

東洋文學

一部五錢 郵稅五厘 每月一回發行

誌中。論文。理文。美文。雜錄。雜纂。等ありて皆是今代の名文東洋文學に恥ざるもの文學者は必ず一本購讀すべきの良誌なり

千葉縣安房郡北條町北條千七百十九番地

發行所

智發堂

社告 注意

!!! 社告

本誌の前金相切れ候時は發送の節帶封に朱書致候間御覽の上は速に御拂込被下度候尙御沙汰なき時は發送の義見合申候此段前以て申上置候也

本誌は凡て前金に候へは御注文のみにては發送不仕候也

五月三十日

義太夫雜誌社會計係

內務省許可 (明治二十六年一月廿六日)

◎投書規則

投書は凡て到着の順序を以て掲載するも未完稿は之を採らず○批評等にして類似のもの者ある時其優れたる者を掲載す○次號に譲し投書にして其事柄の既に陳腐と認むる時之を省く○誌上の匿名なるも投書に住所姓名なき者は掲載せず○投書は眞書にて廿四字詰とし判明に認め義太夫雜誌編輯局宛にて送るべし○投書の返却せず○問合せは往復はかきか又ハ郵券封入の事

社告

本誌定價 一部三錢五厘 前金の分は本社へ

地方は一部に付郵送費五厘申受く

廣告料 一行廿四字詰四錢十行以上一割引

但義太夫謠曲に關する者に限り三割引とす

代金爲替半圓以下は郵便切手にて宜敷以上は

神田郵便電信支局振込受取人岡田廉二宛の事

東京市神田紺屋町四十四番地

發行所

義太夫雜誌社

明治二十六年五月二十九日印刷同三十日出版

東京市神田區紺屋町四十四番地

發行兼編輯人

印刷者

印刷所

岡田 廉二

全市下谷區御徒町三丁目百一番地 奥山 東太郎

全市淺草區黑船町廿八番地 東京並木活版所